

天孫降臨からの三十六計

昭和十二年、私が旧制熊本中学に入学したばかりの四月、初めての国史の授業で若い先生が記紀神話を語った。

一人の級友が質問した。「ニニギノミコトはどぎゃんして天から降りてこらしたつですか。」私も「あ、それ知りたい。」と思って先生を見た。先生は下を向いて薄く笑った。少し何か呟き^{つぶや}2、3秒してキツと顔を上げ、別の話題に切り換えてしまった。質問は完全に黙殺されたのである。私は、あれれと思い、クラスもざわつき、質問した級友も、啞然^{あぜん}としていた。先生のこの反応の仕方の意味が理解できたのは、戦後大分経ってからである。前年の「二・二六事件」の後を受けて、当時、皇国史観が一世を風靡^{ふうび}していた。記紀神話に基づき、天照大神を皇祖と仰ぎ、第一代の神武天皇より第二百二十四代の昭和天皇まで、皇統連綿と続く万世一系の天皇制。この天壤無窮^{てんじょうむきゆう}、万邦無比^{ばんぽうむひ}の国体の下、世界に冠たる伝統を創り上げた絶対不敗の神国日本。これぞ日本人の信念・信仰であり、天皇は現人神で、校長が「天皇陛下におかせられては」と発言すれば、生徒一同直立不動の姿勢を一斉にとらねばならなかった。この神聖なる国体を否定する共産主義者等は天下の大罪人として、治安維持法により獄舎につながれており、自由主義者や国家神道以外の宗教者も狙われていた。あの時、先生が生徒たちを納得させるため「記紀神話は象徴であって事実ではない。」と話したとすれば、史実だと思い込まされている生徒たちは混乱しただろうし、何よりも学校の授業という公の場で神話の作為性を主張し、国体の精華を汚した罪に問われ、特高に逮捕される恐れがあった。その危険を直感した先生は、強引に生徒の質問を無かったことにしてしまったのである。間もなく盧溝橋^{ろこうきょう}で銃声がひびき、天皇の御稜威^{みらい}を世界に及ぼす「八紘一字^{はっこういちじ}」の声と共に超国家主義的国民統制の下、中国戦線が拡大していく。学校も軍国主義教育が進み、生徒を鍛えるという名分で教師の発問に答えられないとビンタを喰ったものだ。